

NP-PAK ism

エヌピーパックイズム

2015 / 2月号

vol.18

環境や資源の保護に優れた容器「紙パック」を提供する「日本製紙株式会社 紙パック事業本部」が、リサイクルのさらなる推進を願って発行する環境広報誌です。

環になる人を結ぶ 6 最終回

黒崎 暁さん

信栄製紙株式会社 代表取締役社長

時代の変化に対応しながら、 紙資源の有効活用と環境事業に取り組む

飲料用の紙パックには、紙にポリエチレンがラミネートされています。ポリエチレンの間にアルミを挟んで作られているのがアルミ付紙パックです。遮光性、バリア性に優れ、長期保存に最適な容器として開発されました。ジュースやお茶、お酒など、さまざまな製品に使われています。

アルミ付紙パックもアルミなしの紙パックと同じく、太く長い良質なパルプを原料としていますが、ラミネートされているアルミが理由でリサイクルが難しく、これまで一部を除きゴミとして廃棄されてきました。このアルミ付紙パックを古紙原料として受け入れている数少ない会社のひとつが信栄製紙株式会社です。さまざまな紙の再資源化に取り組むとともに、日本家庭紙工業会、NPO法人緊急災害備蓄推進協議会の代表を兼任し、広く社会貢献に努める信栄製紙の黒崎暁社長にお話を伺います。

黒崎 晓さん



プロフィール
黒崎 晓 (くろさき さとし)

1939年1月25日、静岡県富士宮市生まれ。
JPコアレックスホールディングの取締役会長。信栄製紙のほか、コアレックスグループ傘下の2つの会社の代表取締役に就任している。
また、日本家庭紙工業会会長、NPO法人緊急災害備蓄推進協議会の代表を務め、紙の資源循環や災害対策など環境事業に取り組んでいる。

時代の変化に対応しながら、 紙資源の有効活用と環境事業に取り組む

時代とともに「古紙」も変化し続けます。消費者が求める新しい商品と、それに伴う新しい容器が生まれ、使い終ったその容器が古紙となつて回収されてくるからです。アルミ付紙パックもそのひとつです。使用済み紙パックが古紙の回収品目として認知されている現在でも、アルミ付紙パックは禁忌品としている自治体が多く、可燃ゴミとして焼却処理されています。芯のない長尺巻のトイレットペーパー「コアレス」の製造で知られている信栄製紙は、時代の変化に応じた技術開発に努めることで、アルミ付紙パックなど禁忌品に指定されている古紙を積極的に受け入れてきました。

雑がみとしての受け入れ

静岡県富士宮市に工場をもつ信栄製紙は、会社の設立が1961(昭和36)年、トイレットペーパーの製造開始が昭和40年代半ばと、家庭紙メーカーとしては後発で、設立当初は原料となる古紙をどう集めるかが大きな課題となっていました。そこで、グループ会社のひとつで機械設備の製造を行っている三栄レギュレーターとともに、技術の研究と開発に努め最新鋭の原料設備を導入し、アルミ付紙パックを含む難再生古紙を積極的に受け入れたと言います。

「異物除去をする設備の導入とともに、リサイクルの工程で出る廃プラスチックなどの後処理の問題をクリアすることが課題です。現在、廃プラスチックは三栄レギュレーターの東京工場に輸送して処理しています。燃やして熱エネルギーを回収するサーマルリサイクルを行っているのです。当初は燃料化の際に廃プラに混じるアルミの残渣(燃やしてガス化したものが、その後冷えることで発生する石のような固まり)が、炉を痛めるのではないかと心配しました。東京工場にある三段式のストーカーでは特に問題は起こらずにすみました」

地産地消の理念

環境問題などへの社会貢献は、ごみの減量だけではありません。信栄製紙では、全国に広がるコアレックスグループを組織し、技術の共有をしています。

◀市民から古紙(雑がみ)の持ち込みを受け入れている。事務所入り口には、無料配布の紙紐が積まれている。



雑がみを入れる段ボール箱。市民だけでなく、信栄製紙社員にも配られ、リサイクルの啓発に役立てている。

三栄レギュレーターの東京工場は、川崎ゼロ・エミッション工業団地の中に位置しています。循環型社会の実現に向けて、構成する企業との連携をとっています。信栄製紙では企業からなる機密文書も段ボールのまま受け入れていますが、スクリーニングでできるクリップやバインダーなどの金属やアルミも工場団地内の各工場で再利用されています。

「もったいない」と思う気持ち

環境問題への視点

ある時、行政からの依頼で、市のごみ調査に出向いた黒崎さんが見たものは、捨てられているごみの約半分を占める再生可能な紙類でした。

「可燃ごみから雑がみを分別してリサイクルすることで、ごみは半分に減らせるのです。ごみの問題はその量のことばかりに目がいきがちですが、問題は紙ごみを燃やしたあとの灰です。相当な量の灰が残りますので、それらを埋めたてていく場所をどう確保していくかが深刻な問題なのです。どのような紙でも受け入れていくという姿勢は、製紙原料のためだけではなく、環境問題解決へのひとつの糸口となっていくと思っています。現在、富士宮市のごみ焼却場には弊社への回収がございます。可燃ごみの中に再生可能な紙類があれば市職員が引き抜いてからに入れ、私たちがそれを回収に行くということをしています。その雑がみの中には、多くのアルミ付紙パックも入っています。良質なバルプでできているのですから焼却されてしまうなんてもったいないと思うのです」

それぞれの工場では、地元で回収した古紙を原料として使用しています。この『地産地消』という理念は、輸送コストやCO₂の削減、地域の雇用促進につながっています。また災害時に一部地域の工場が稼働できなくなつた場合でも、グループ各社が連携することで安定した家庭紙の供給を可能にしています。広い視野でのアプローチがさまざまな可能性を生んでいきます。



神奈川県川崎市「かわさきPR21」。地域で回収した古紙を使った地域ブランドトイレットペーパーのひとつ。上の写真は芯なしのもの。65m巻芯ありも生産されている。

アルミ付紙パックリサイクルのこれから

「回収できない品目」ということが市民に浸透してしまつてていることが、アルミ付紙パックの回収をより難しくしていると黒崎さんは言います。

「アルミ付に限らず古紙原料としての紙パックは常に不足しています。回収率も横ばいの状態です。しかししながら、ここ富士宮市で毎年夏に開くコアレックス主催の『ふじのくに紙まつり』では、使用済み紙パックとトイレットペーパーとの交換イベントに、一日でおよそ3トンの紙パックが集まります。まだまだ紙パックは集められる感じです。イベントにご来場いただいた方々や工場見学にいらした方々には、アルミ付でもリサイクル可能なことを広く認識してもらうようチラシを配るなど啓発に努めています」

社長と社員の距離が近く、いろいろな提案を直に伝え検討しあうという社風のなか始めたことのひとつに、飲食店への働きかけがあります。

「家庭からの回収量ではわずかであるアルミ付紙パックですが、飲食店では比較的まとまった量がでます。静岡県に点在するモスバーガーさんと協力し、アルミ付を含めた紙パックの回収を始めました。回収時には業務用のトイレットペーパーを置いてきました。モスバーガーさんはそれらを近隣の小学校に寄付されているそうです。回収ルートを築くまでには費用がかかりますが、まずは“行動してみよう”という姿勢が常にあります。行動することで、点が線となり、やがて面となり、新しいリサイクルのシステムが確かなものになっていくと思います。アルミ付とアルミなしと、紙パックの同時回収が実現する日も遠くないと確信しています」

NS-FUJIPAK SYSTEM

NS-FUJI (フジパック)

ポリエチレンの間にアルミをラミネートした容器が光や酸素からの劣化を防ぎ、牛乳やジュース、お茶などの飲料を無菌環境下で充填することで、数ヶ月間の賞味期限を可能にすることから、アルミ付紙パックは、LL (Long Life) 紙パックと呼ばれています。最適な複合素材化や容器形状デザイン、さらには、高度な技術を結集した充填機があつて初めて可能となります。当社の NS-FUJI (フジパック) システムは、LLシステムで長い経験と実績を持つ日本製紙と、液体充填機で世界をリードする四国化工機が、それぞれの技術を結集し共同で開発した最新鋭の無菌充填包装システムです。

紙パック事業本部の生産会社である江川紙パックにて、NS-FUJI(フジパック)を製造する際に排出される損紙は、今号の特集で取り上げたコアレックスグループである三栄レギュレーターに送られ、リサイクルされています。「LL紙パック リサイクル推進研究会」にも参加し、会員との調査・研究、情報交流を深めており、今後もより進んだ循環型社会の形成に貢献すべく努めています。



LL紙パックリサイクル推進研究会の施設見学会。
今号の特集である信栄製紙さんと、16号の特集で取材させていただいた丸富製紙さんの沼津工場を見学しました。



社内での回収の様子



赤星たみこの Milk Break



■赤星たみこ
漫画家・エッセイスト。
エコや家事に関する連載や著作多数。
環境問題の講演会でも活躍中。

紙のリサイクルは、多くの人の手とアイディアによって実現しています。昔は「そんなことするより燃やしたほうが手取り早い」と言う人もいましたが、今は技術も進み、効率よくリサイクルできるようになってきました。

と、ここまでちゃんとわかっている人はいいのですが、「リサイクルはしても無駄だ」という20年前の理論をいまだに信じている人もいます。なぜかエコやリサイクルに関しては否定的な意見を信じる方がインテリっぽく見える、と思っている人が多いようです。

が、ちゃんと情報を集めると、紙パックのリサイクルがとてもうまく行っているということがわかります。昔はダメだったアルミ付紙パックも、ちゃんとリサイクルできるんですよ！ ポリエチレンを分離する技術があればアルミの分離も問題なくできるのです。

環境を語るには、最新の正しい知識を常に取り入れていかないと、的外れになってしまいます。私も一方向からだけ見てしまうことが多いのですが、そうならないよう、アンテナを敏感にしていなければならぬと思います。いつまでも勉強は必要ですね！

「NP-PAKism」休刊のお知らせ

2005年11月の第1号から10年にわたり発行してまいりました環境広報誌「NP-PAKism」は今号をもちまして休刊とさせていただくことになりました。これまで、取材をはじめとして制作に御協力いただきました皆様には、厚く御礼申し上げます。この10年の間にも、東日本大震災をはじめとするさまざまな災害がありました。また一方で5年後に迫るオリンピックへの期待と、社会は常に大きな変化のなかにあります。今後も紙パックのリサイクルを通じて、環境活動に携わっていく所存です。どうぞよろしくお願ひいたします。



日本製紙株式会社 紙パック事業本部環境広報誌 NP-PAKism Vol.18 2015年2月発行
編集：日本製紙株式会社 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台4-6 御茶ノ水ソラシティ
TEL.(03)6665-5555(代表) FAX.(03)6665-0350
e-mail npp-qa@nipponpapergroup.com URL http://www.nipponpapergroup.com/

当社のウェブサイトから環境広報誌「NP-PAKism」のバックナンバーがダウンロードできます。